

黒船「ハーマン号」兵士の肖像 ～新式装備と共に散った熊本藩兵～



長らく和船や火縄銃を用いてきた日本は、幕末に至り蒸気船と連発銃へと急速な軍事技術の進歩を遂げました。左の熊本藩兵の再現写真では、左腕に新政府軍の目印「錦裂(きんぎれ)」を、右腕に藩の目印となる白布片を着け、小銃は単発式ながらも、雨天に強く装填も速いエンフィールド銃です。ハーマン号遭難絵巻によれば、208名の犠牲者の内、76名が足軽とされており、絵巻物中にも上下黒色の兵が散見されます。新式装備に身を固め、意気揚々と五稜郭攻撃に出港した彼らは、結果函館に辿り着くことは叶わず波間にその命を散らしましたが、熊本県出身の千葉県知事藤島正健らが明治25年に建立した慰霊碑は次の一文で締めくくられています。

鬼浦の海 颶風(ぐふう)暴起す
二百の甲士 濤(なみ)を冒して没す
厲鬼(れいき)とならず茲(ここ)に義鬼となる
遥か皇城に向かい 百鬼鎮護す

熊本藩兵の再現 (一部想像含む)

陣笠や脇差し草履など、まだ江戸時代の装いを残していますが、詰め襟の制服や、西洋諸国でも採用して間もないエンフィールド銃などに、幕末の急激な軍制改革を見ることができます。(撮影協力：覚翁寺様)

要訳：風雨を冒し進撃していた二百余りの精兵は、川津沖の鬼ヶ島で突風に遭い、図らずも亡くなってしまった。しかし、彼らは恨みを吞んで彷徨う亡霊とはならず、義に篤い英霊となったのだ。彼らは今もこの地から皇居に正対し、国を鎮護し続けている。

■エンフィールド銃の発射手順



①弾丸と火薬が一体化した
「弾薬包」を取り出す



②弾薬包の火薬側の縁をちぎり
取る



③火薬を銃身内に流し込む



④弾丸を包み紙ごと銃身に押し込み、
余分な紙包みをちぎり捨てる



⑤弾丸を銃身内に押し込む



⑥撃鉄を半分起こす(この状態では、万
一引き金に触れても撃鉄が落ちない)



⑦雷管入れから雷管を取り出す



※雷管入れ内部は小さな雷管が
転がり出ないように羊毛が詰め
られている



⑧銃身内の火薬に通じる小穴
「火門座」に雷管を被せる



⑨撃鉄を完全に起こす (これで
初めて引き金と連動する)



⑩狙いをつけ引き金を引く



⑪撃鉄が雷管を叩き点火・発射
される